

密林の中から甦った

フォト・レポート

アンコール遺跡

撮影・文 中塚 裕

「東洋の奇蹟」と称されるアンコール・ワット。アジア最大級の石造建築物は、今かなりの修復が済み、荘厳な姿を現していた。カンボジアに平和な日々が戻るにつれ、観光客も数多く訪れるようになり、アンコール遺跡に活気が甦ってきている。



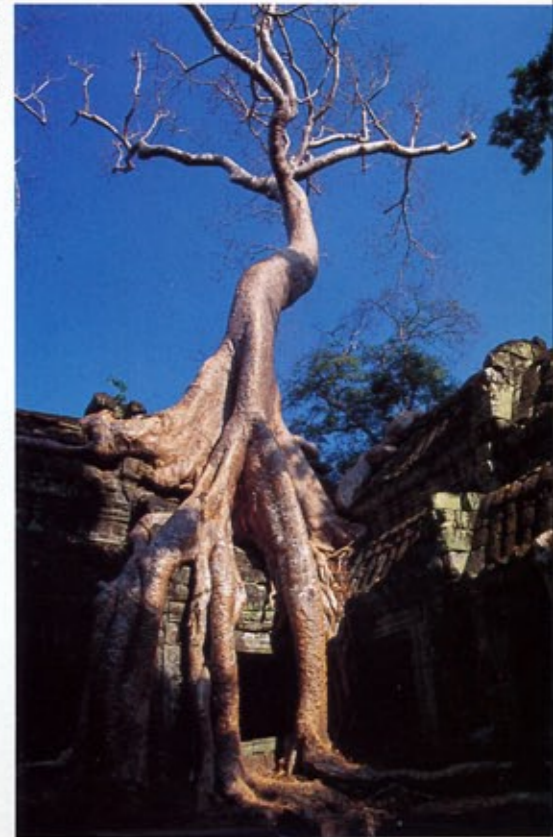
境内の聖池に映るアンコール・ワット。30年間にわたって造営され、12世紀前半スールヤバルマン2世統治下に完成。奥に僧侶の行列が。

穏やかな微笑を浮かべるバイヨンの四面塔の親世音菩薩。50余りの堂塔に、その総数は寺院全体で194面もある。



(上) 壮麗なアンコール・ワットの第1回廊内部の浮き彫りは、クメール民族が世界に誇る偉大な文化遺産。この東面の南側にある有名なヒンドゥー教天地創造神話からとった「乳海攪拌」の場面。(左2点) また回廊等の壁面には艶やかな容姿のデヴァター(女神)が1700体以上彫られている。宮廷の女官、踊り子がモデルともいわれている。

(右) ガジュマルの破壊力が凄まじいタ・ブローム寺院。クメール王朝の最も偉大な王ジャヤバルマン7世が母親を弔うため建立した。



(左) バイヨンはアンコール・トムの中にあり須弥山(メー山)を象徴化した寺院である。アンコール・トムとは「大きな町」の意味。

(右2点) 上座部仏教を信仰するカンボジアの人々とフランス人観光客たち。



九年ぶりにアンコール・ワットを訪れた。巨大で壮麗なその姿に圧倒されながら、私はその変容ぶりに目を見張らされた。

かつて、石材の劣化や風化のために崩れ落ちようとしていた祠堂や、地衣類に覆われて薄汚れていた壁面の浮き彫りが、かなり綺麗に修復されているのだ。これは、人類の文化遺産として、ユネスコをはじめとする国際協力による遺跡救済活動の成果であろう。

とともに、人々もアンコール遺跡に戻ってきた。回廊を巡視する出家修行僧の列に出会った。外国人観光客と思われるグループは幾つも見かけた。驚いたことに、結婚式直後と思われるカ

ップルまでいる。

地元ガイドの話によれば、外国人観光客として最も多いのは日本人だという。どうやら、アンコールは東南アジア最大の遺跡としてその魅力を認められつつあるようだ。

関東地方ほどの広さのなかに七〇〇カ所以上の遺跡が残されているアンコール。アンコール・ワットは、そのごく一部にすぎない。少し離れたところには、バイヨン寺院を中心としたアンコール・トムがある。ガジュマルの巨木が覆い被さっているタ・プローム寺院もよく知られている。

それらの歴史的建造物は一五世紀に一度密林に放棄され、一八六〇年にフランス人のアンリ・ムオに再発見される。二〇世紀初頭からフランスによって主要遺跡の修復がなされていたが、一九七〇年代の内戦でまたも打ち捨てられ、八〇年代になってようやく本格的な修復作業が行われるようになった。現地で、一七年間一八次にわたり遺跡調査に当たっている上智大学の石澤良昭教授に話を聞いた。

「アンコール遺跡は、カンボジア民族の自負と誇りの源泉。遺跡の保存修復への国際協力はテクニカルな援助だけでなく、まず、カンボジアの人たちが自らの手で発掘や保存ができるように、人を育てなければなりません」

「真の復興」までの道のりは、まだまだ遠いようだ。



(上) 日本からの文化援助として、バイヨンの経蔵修復作業を続ける日本国政府のアンコール救済チーム。

(右側) プノンベン王立芸術大学学生と共にバンテアイ・クディ遺跡の発掘調査を進める第18次アンコール遺跡国際調査団。(左側) カンボジア文化統括大臣と談笑する石澤良昭教授。



カンボジアの人々にとって憧れの地アンコール・ワットで、プロカメラマンによる記念のビデオ撮影をする新郎新婦。

